

# 千歳の大規模遺跡調査と世界遺産登録

畑 宏 明

北海道埋蔵文化財センター  
常務理事

## 美々貝塚と新千歳空港

今から四〇年以上前になるが、私が千歳の遺跡をはじめ訪れたのは昭和四十（一九六五）年春のことであった。北海道学芸大学（現在の教育大学）に入学したばかりであったが、すぐさま考古学研究室に出入りさせてもらっていた。そこへ、地学研究室から、ゴールデンウィークに千歳の美々貝塚周辺を巡検するので参加しないかとお誘いがあった。

当日は、よく晴れた絶好の巡検日よりであった。札幌駅に集合、普通列車で現地に向かう。美々駅で降り、踏切を渡り小高い丘の上にある貝塚へ向かう。貝塚はその発掘地点を観察できるように木枠で土留めされていた。発掘穴の底の方に白い貝層が見える。私が貝塚の断面を見たのはこれをはじめで、黒土と白い貝殻のコントラストがとても鮮やかで印象的であったことを記憶している。

美々貝塚の巡検から一〇年近



写真-1 美々貝塚の断面

く経ち、私は北海道教育委員会（以後「道教委」）に文化財保護の専門職員として勤務していた。昭和四十九年から千歳市教育委員会（以後「市教委」）が行っていた新千歳空港の埋蔵文化財分布調査が終了し、五十一年から道教委が発掘調査を行うこととなった。調査は私も担当することとなったが、新しい空港の建設地は、美々貝塚から国道36号を渡った西側一帯に広がる懐かしい美々の丘陵地帯である。

## 大規模調査の試掘

新千歳空港建設予定地の美沢川流域遺跡群の調査は、結果として二〇年以上にわたり二〇<sup>〇</sup>以上の広さを発掘することになるのであるが、道内では苫小牧東部工業地帯と並ぶ大規模調査となった。当時としては、道内では誰も経験したことのない大規模な発掘調査であるから、さまざまな課題を乗り越えなければならなかった。それは前段で市教委が行った分布調査の時点から始まっていた。

当時は学園紛争の余波がまだ冷めきれず、前年の昭和五十年に開かれた日本考古学協会札幌大会も紛糾し、多くの研究発表が中止を余儀なくされた時代である。埋蔵文化財保護については、教育研究機関である大学が開発行為と関係をもつことが罪悪視されており、文化財保護としての緊急発掘自体もその是非がさかんに議論されていた。

新千歳空港の建設予定地は、広大な山林であり、表面には火山灰層が厚く堆積していた。表面調査ではほとんど埋蔵文化財の情報を得られなかった。そこで、調査のために切り開いた五〇<sup>〇</sup>平方メートルの交点をバックホウで掘削し、掘削断面や掘りあげた土を調べ遺跡の存在を確認する手法が採用された。今日では機械力を活用して試掘を行うのが一般的であるが、一部の研究者からは遺跡の破壊につながる確認方法であるとの批判があった。情



写真-2 新千歳空港建設予定地での発掘調査（千歳美々4遺跡、昭和58年度 道埋蔵文化財センター提供）

報の乏しい場所で遺跡の探査を行おうとする場合に機械力を活用して行う試掘調査は、今では遺跡に与える損傷の程度はわずかであり、地中の様子を容易に見ることができるとして信頼性の高い方法として大方に認められている。しかし、当時は暗中模索時代で、推進する側も疑問を呈する側も想像上の議論の域を出なかったのである。

これ以降、道教委では埋蔵文化財の確認のために日常的に試掘を行うようになったが、その後の埋蔵文化財の把握が完璧かという点必ずしもそうはなっていない。重機の性能を超えた深さなどの場合はやむを得ないとしても、多量の黒土から、少量の小破片しか出土しない場合は、見落としによるエラーを完璧になくすることは難しい。現地の条件などを考慮した適切な運用が望まれるところであるが、近年は恒常的な予算の減額などもあり、現場担当者にとっては相変わらず困難な局面が続いている。

#### 発掘の単位区画の設定

発掘調査の進め方や遺物整理のための分類基準についても悩みは尽きなかった。その頃の発掘調査は、二六四方の単位区画（現場では「グリッド」と呼び習わしている）を採用することが多かったが、それを試掘調査で採用した五〇四方眼の測量線に合わせようとすると、一辺が二五区画、区画数は六二五区画となる。空港の全域をこれで扱うとなれば煩雑さが目立つため採用しかねることとなった。そこで、逆に五〇四方眼の区画を一辺一〇区画、全体を一〇〇区画に細分し、最小の単位区画を五区画とした。最小単位を倍々する発想から、十進法で分割する発想に切り替えたのである。しかし、実際に作業をしてみると、五区画の単位区画には長短両面があることがわかった。

長所は、大人数の作業員を役するのに便利なことである。大規模発掘調査では、規模に比例して使役する作業員の数も増える。作業員は一〇名前後の班をつくり共同で作業にあたる人が多いが、五六四方の単位区画だと一〇名くらいまで人が入ってもそれほど混雑感がなく作業でき、比較的効率がよい。反面、五区画というのは小型の竪穴住居跡よりも大きく、密集地では一区画の中に多数の遺構が分布することとなり、遺物も多くなる。その結果、土器などの復元や遺構と遺物の共伴関係の判定などの作業に不便をきたすことが多いのである。作業的には、やはり二六四方程度が扱いやすいようである。道教委の事業を引き継いだ財団でも、今では二六の倍にあたる四六四方の区画を採用することが多い。遺跡調査の精度を確保する観点からも、このあたりが妥当なサイズではなからうか。

#### 遺物の分類と名称

もう一つは、土器や石器などの出土品の分類要綱を示したことである。

遺物の分類は物質文化の最終的な認識へとつながる考古学上の最も重要な作業であるが、人により見解が異なるだけでなく、研究の進展によりその変更を余儀なくされることがあるなど、永久不変のものではない。だからといって大規模発掘調査に携わる担当者がそれぞれ勝手な記載をしていたのでは、とうてい調査結果をひとつの報告書にまとめることはできない。そこで、土器については大方の研究者が受け入れられる程度に大まかな分類を行って記載することとなった。

初期のころの記載には粗密の程度に差があるものの、縄文早期から晩期そして続縄文までを、そして、各時期の前半、中頃、後半を a、b、c と記号で表した。この表記は、言葉を記号に置き換えただけのように見えるが、土器文化の体系を見通さなくてはできない仕事である。今日では、道内の埋蔵文化財調査報告書で一般的に見られる表記法となっており、土器編年などの議論ではスタート台としての役目を果たしている。

また石器の分類は、製作技法と形態をもとにそこから推定される機能を加味した分類を行っている。最も特徴的なのは「石匙」の名称を「つまみ付きナイフ」に改めたことである。この石器は縄文文化を代表する石器のひとつで、匙（スプーン）のような形をしていることから古くから「石匙」と呼ばれている。今でも全国的に広く使われている名称であるが、ナイフの機能をもつことが明らかなることから表記名を改めたものである。この名称変更については、道内では特段の批判意見もなく受け入れられているが、本州の研究者の中には違和感を感じる人も多いようだ。いろいろな場面をとらえて解説を続けることが必要と感じている。

石器の名称については、例えば「磨製石斧」すなわち「磨いて製作した石の斧」のように製作技法や材質そして形態・機能などを表す言葉を組み合わせて表現することが多い。しかし、縄文石器の機能については形態が

らイメージだけで類推したものが多く、それがそのまま名称となっている。したがって「石槍」と呼ばれるものの中には、とても槍としての機能を想定できないような雑多なものまで含まれることがある。学問としての石器研究以前の曖昧さの表れである。「つまみ付きナイフ」の命名は、そのような古い意識を打破する突破口であると私は受けとめているが、そこまで考えるのは少々大げさであろうか。

#### 世界文化遺産としての縄文遺跡群

新千歳空港の発掘調査は、縄文時代の周堤墓や盛土墓、擦文から近世にかけての船着き場などが発見され、美々四遺跡の「動物形土製品」や「美々八遺跡出土品」のアイヌ文化遺物は重要文化財に指定されている。

その後、平成七（一九九五）年からの北海道横断自動車道建設に伴うキウス遺跡群の発掘調査においても周堤墓と集落跡が出現している。また、最近は国道三三七号の発掘調査でオルイ力遺跡などから近世アイヌの集落跡が続々と発見されている。これらは、いずれ



写真-3 国指定史跡キウス周堤墓群（道埋蔵文化財センター提供）

も千歳地域の歴史的な発展を証明する遺跡である。遺跡の詳細については発掘報告書として順次公表されているが、貴重な出土品も多いので多くの方々にご覧いただきたいと思っている。

昨年、北海道北東北の縄文遺跡群が世界文化遺産の国内暫定リストに載った。道内では函館市南茅部地区大船遺跡の大竪穴住居跡や森町鷲ノ木遺跡のストーンサークル、そして伊達市北黄金貝塚などが候補になっているが、今のところ千歳市が誇る国指定史跡「キウス周堤墓群」は候補となっていない。

キウス遺跡は、縄文時代の精神文化のピークを表す大規模墓地遺跡であり、これを抜きに縄文遺跡の世界遺産登録はあり得ないと私は思っている。是非とも多くの市民の理解を得て候補に加わってもらいたいものである。

平成二十二年の春ごろには、旧長都小中学校跡に千歳市の新しい埋蔵文化財センターがオープンする予定である。ここでは常設展示も準備されているとのことであり、千歳の歴史研究と文化財保護の拠点としての活動が期待されている。

幸か不幸か、ユネスコによる世界遺産の登録までには、先行する候補が多いためこの先一〇年くらいの時間がかかりそうである。新埋蔵文化財センターを核とした市民活動を広げるには十分な時間があるので、キウス遺跡を含めた縄文遺跡群の世界遺産登録も決して夢ではない。

市民の手による世界遺産登録の実現を！